（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	佐野文哉
論文題目	多言語状況における境界の形成と変容：フィジーのろう者をとりまく多言語状況と言語イデオロギーにかんする文化人類学的研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、申請者が 2013 年から 2020 年にかけてフィジーのヴィティレヴ島で行った延 22 か月間の実地調査に基づいた、全８章から構成される文化人類学的研究である。論文の目的は、フィジーのろう者の手話をめぐる諸実践が言語イデオロギーの介在によって揺れ動く様態を具体的事例によって明らかにし、多言語状況や言語イデオロギーに関する文化人類学的議論を再検討することである。

「第１章 序論」では、多言語状況、言語イデオロギー、ろう者や手話に関する先行研究を検討したうえで、論文の視座を提示し理論的に位置づけた。多言語状況を扱う近年の研究では、話者が用いる多様な記号的資源を「単一の全体」として捉える複言語的アプローチを展開しており、本論文も同様の方向性をとる。ただし複言語的アプローチは、言語の複数性や動態的変化、社会指標的価値について未だ十分な検討を行っていない。この問題を解決するために、本論文では言語イデオロギーをとりあげ、手話以外のジェスチャーにも着目する。加えて、言語実践の多様性や流動性に注目し、フィジーのろう者の手話をめぐる社会状況を明らかにする。

「第２章 フィジーにおける手話およびろう者コミュニティの現状と形成史」では、フィジー手話ならびにろう者コミュニティが多様な国や地域の手話およびろう者との接触の結果として形成された過程について記述する。フィジー手話は、オーストララジア手指英語（ASE: Australasian Signed English）を原型とし、さらに他地域の手話の影響がみられる。またろう者コミュニティは外国との交流のなかで形成され、そこには外国の言説や実践が流入している。

「第３章 手話やろう者コミュニティにみられる地域差」では、ヴィティレヴ島のろう者のあいだで「首都スヴァ対西部」という地域集団区分がみられる状況をとりあげる。これは、フィジー一般にみられる東西の違いを反映すると同時に、東西のろう者をとりまく教育・社会環境が手話表現の差異として表出したものである。東西地域差は、両地域のろう者や手話の優劣を表したものではない。しかし、ろう者の認識では、東西のろう者の「内在的性質」や手話の「真正性」の差異として解釈されている。そうした認識は、フィジーのろう者の日常的実践や政治的活動を方向づけている。

「第４章 フィジーのろう者をとりまく多言語状況」では、ろう者が用いる記号レパートリーについて、人々のメタ言語的認識にもとづいて分析する。なお、以下の大文字によるスペル表記は、手話言語表現を表す。フィジーのろう者が用いる記号レパートリーは SIGN（フィジー手話）、OWN SIGN（慣習的ジェスチャー）、ORAL／LIP-READING（口話）、書記言語、外国の手話の五つに大別される。SIGN は英語の影響の程度に応じて、

さらに DEAF LANGUAGE と ENGLISH SIGN に分けられる。ろう者は多様な記号レパートリーを使い分け、ときに混用しながら他者と対話している。いわば記号的資源が複層的に重なり合う状況こそが、フィジーのろう者および周囲の人々にとっての常態である。

「第５章 フィジー手話の公用語化に向けた取り組みと DEAF LANGUAGE の推進」では、首都にあるフィジーろう者協会（FAD: Fiji Association of the Deaf）に所属するろうの若者の活動をとりあげ、背後にある言語イデオロギーについて考察する。FAD で活動するろうの若者は、フィジー手話の公用語化と普及、手話統一に向けて取り組んでいる。こうした活動は、国会中継への手話通訳導入等、一定の成功を収めている。ただし、ここでいうフィジー手話とは、ろう者が SIGN とよぶ記号レパートリーのうち DEAF LANGUAGE のみであり、英語との差異が過度に強調されている。こうした姿勢は、ろう者の手話の多様性と DEAF LANGUAGE の英語的な側面を不可視化し、結果的にろう者の記号レパートリーに大きな影響を及ぼしている。

「第６章 「正しい手話」をめぐるイデオロギーの多様性と言語的差異化」では、ヴィティレヴ島東西の「正しい手話」をめぐる言語イデオロギーの違い、それが人々の手話実践に与える影響について考察する。FAD の主導する手話統一への志向とは裏腹に、西部のろう者は手話の差異化を目指している。西部のろう者は、スヴァの手話がアメリカ手話の影響を受けている点を指摘し、ASE を「本来のフィジーの手話」として重視する。さらに、外国からの影響を排した「正しいフィジー手話」の創作と普及を目指している。しかし西部のろう者の見解は、必ずしも手話実践の現状を的確に捉えていない。むしろ、フィジー手話に内在する「他言語性／多言語性」の縮減に向かい、手話およびろう者コミュニティ内部の多様性や地域差が、逆説的に強化されている。

「第７章 「自分たちの言語」への関心の高まりと記号レパートリーの境界の変動」では、ろう者が手話以外の記号レパートリーに対してもつ認識を分析する。ろう者はフィジーの現地語に対して、たとえ自分が理解し使用できない場合でも肯定的な態度を示す。背景として、国内の社会情勢や留学経験の影響による「自分たちの言語（OWN LANGUAGE）」への関心の昂揚が認められる。こうしたなか、かつて「手話ではない」ものとして否定的に捉えられていた OWN SIGN（慣習的ジェスチャー）は、一部ろう者の間で ASE を原型とするフィジー手話とは異なる「土着の手話」あるいは「真のフィジー手話」とみなされるようになった。この状況から「言語／非言語」境界の揺らぐ様相が明らかになった。

「第８章 考察と結論」では、議論を整理したうえで総合的な考察を行う。フィジーの手話をめぐる状況は、記号レパートリーの複層性を背景とした、多様かつ流動的な言語イデオロギーの介在により揺れ動いている。さらに、手話をめぐる複層的状況は、新たな言語イデオロギーの形成を促す。本論文における言語イデオロギーの検討は、絶え間ない変容過程のなかにある手話実践を新たな可能性へと開くとともに、多言語状況下の手話実践について、より動態的な観点から理論化することを可能とする。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、多言語国家フィジーにおけるろう者コミュニティの諸活動および手話実践を民族誌として記述し、多言語状況下にある手話をめぐる言語イデオロギーの動態について論じた文化人類学的研究である。申請者は、フィジーのヴィティレヴ島にある障碍者学校およびろう学校において、2013年から2020年にかけて延22か月間におよぶ実地調査を遂行し、綿密な一次資料を収集した。

フィジーでは植民地期、サトウキビ・プランテーションの契約労働者であったインド人の子孫が定着し、現在インド系住民が人口の４割近くを占めている。また首都スヴァは、イギリスの西太平洋植民地総督府がおかれた政治・経済的な要衝として発展してきた。そのため、オセアニア島嶼部各地から多様な人々が渡航してきた。こうした歴史的経緯によって、フィジーは先住フィジー系とインド系住民を中心とした、多民族・多言語国家を形成している。しかし1987年のクーデタ以来、慢性的に不安定な政治情勢にあり、現在に至るまで、国民統合が重大な課題とされている。

1980年代前半、イギリス手話の系譜を引くオーストララジア手指英語がフィジーに導入され、フィジー手話形成の端緒となった。手話導入を契機として、障碍者学校やゴスペル派キリスト教会を拠点としたフィジーのろう者コミュニティが生成した。本論文では、こうした社会・歴史的背景のもとにあるろう者コミュニティの手話をめぐる動向について、言語イデオロギー概念を軸に据えて考察している。申請者のいう言語イデオロギーとは、特定の社会・文化的状況を生きる人々の間で、多様な利害関係を伴いながら形成・共有される、言語を媒介した観念や言説と定義される。

近年の動向をみると、留学を経験した一部のろうの若者は、手話が社会一般に広く認知されている諸外国の実状を知り、フィジー帰国後、国会中継映像に手話通訳を導入するよう政府に働きかけ、その実現に成功した。さらに、ろう者ならびに手話の存在を社会に知らしめるための活動を積極的に行っている。活動の過程で、フィジー手話が公用語に採用される目標実現のために、多様な手話の統一を図る動きが生じた。そのとき、フィジー手話から外国由来の表現を排除し、「真正なフィジー手話」を創造する機運が高まった。ただし、言語イデオロギーに関わる国民統合政策に合致する理念的なフィジー手話が、ろう者の実際に用いる記号レパートリーの多様性や柔軟性と齟齬を来している。申請者は、この点を的確に指摘している。

本論文の特筆すべき点は、まずオセアニア島嶼部のみならず、世界の新興国におけるろう者コミュニティや手話に関する文化人類学的研究が寡少な状況下、筆者自身がフィジーで使用される複数の手話を体得し、ろう者の活動に深く参与して、緻密な観察に基づいた手話表現や出来事のきめ細かい記録を民族誌的に提示したことがあげられる。また、オセアニア島嶼部におけるろう者コミュニティおよび手話の研究は緒についたばかりであり、本論文は、当該分野の進展に寄与する基盤を築いた貴重な研究と認めることができる。さらに、言語イデオロギー概念の導入によって、社会・政治的動向とろう者コミュニティの諸活動を重ね合わせた分析手法は独創的である。

フィジーのろう者による多様な手話実践を扱う本論文の方向性は、多言語社会を対象とした複言語的アプローチに近接している。「言語的近代」を批

判し、話者の言語使用を「単一の全体」として捉えようと試みる複言語的アプローチは、本論文の記号レパートリー概念と相通ずるものである。ただし申請者は、複言語的アプローチの重要性を認める一方、言語間の境界を前提とせずに多言語状況を生きる人々の言語実践を分析するために複言語的視座を採用したにもかかわらず、言語間の越境を論じるにあたり、逆説的に言語間の境界を措定せざるを得ないという矛盾を指摘している。そこで本論文では、言語イデオロギーを重点的にとりあげたうえで、ろう者が多様な手話を「混用」するのみならず、手話以外のジェスチャーを使用するという言語と非言語の区分を消却する対話状況にまで、積極的に視座を拡張している。

また、従来の手話言語学は、メタ言語的な社会的事象を等閑視してきたため、言語イデオロギーを主軸に据えた本論文の分析手法は、従来の手話言語学とは一線を画す新たな視点を提供している。加えて申請者は、地域的差異を排してフィジー手話の統一を目指す言語イデオロギーの硬直性と、柔軟なろう者の手話実践の往還的関係に着目する。申請者は結論部において、手話と言語イデオロギーをめぐる複層性と動態的な不確定性が、ろう者の手話実践を開かれた未来へと導く可能性について強調している。

以上のように、本論文は、オセアニア島嶼部におけるろう者研究および手話研究として、質の高い貴重な民族誌資料を豊富に提示している。また、多民族・多言語国家における国民統合と地域的対立について、ろう者コミュニティ間の地域差に関連づけて論じながら、優れた洞察を行っている。さらに、手話を含む多言語状況において、言語イデオロギーの包含する動態的性質を明快に描出し、的確な理論的考察を行っている。本論文の射程は言語人類学の枠組みを超え、身体所作を含めたコミュニケーション論や相互行為論の独創的な理論構築へ展開する期待を抱かせるものである。

ただし近年、言語学や言語人類学の一部領域では、発話行為を重視する傾向がある。確かに本論文では、諸研究が推進してきた、発話行為がコミュニケーションの過程でいかに時間的・空間的に組織化されているかを論じる視角を十分に展開しているとはいえない。しかしながら、「ろう文化」を強調する社会運動において、ろう者自らが手話を本質主義的に捉える点に着目し、戦略的に言語イデオロギーに焦点化したことは評価すべきである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和３年７月８日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降